
監獄の リッチウィンガー 【COINS】 『朱雀』

アマゾン滝沼 3rd いむぱくと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

監獄の リッチウィンガー 【COINS】 『朱雀』

【Nコード】

N1271M

【作者名】

アマゾン滝沼 3rdいむぱくと

【あらすじ】

その監獄はネズミ一匹入れやしない。

その監獄はネズミ一匹逃がしやしない。

その猛禽は神域にだって容易く入り込む。

その猛禽は悪魔にだって縛れやしない。
。

前編（前書き）

短編程度の長さですが、半端なので分割しました。

*後半に軽く残酷描写がありやがります。

前編の雰囲気的に「……行ける！」と思ったらお進みください。

前編

リッヂウィガー

ある晴れた日の夕暮れ。傾斜のキツイ坂を下って行く。
あいつは死んじまっただろうな。仕方がない、その辺は諦めと
こう。

人間誰しも死にたくってしかたないじゃねえかって思うことがある。そりゃそうだ、俺はあまりにも人が死ぬ様を眺めすぎた。

直接手を下したものもあるし、見知らぬ誰かが見知らぬ誰かをやって
いるところにも散々に遭遇した。

見たし、傍観したし、時には関与したし無視したし。

「くだりもしねえ。だってどれも変わらねえからよ」

灼熱に次ぐ灼熱。高温に勝る高温。焦げ付く肌が臭う、赤黒いコ
ートが邪魔だ。瞳孔の小さい瞳は猛禽類のそれに近い。

ツバがやたら広い“テンガロンハット”。これはだからといって
効率の良い日よけになってくれるわけではない。

汗が頬を伝う。

水も滴るではないが、とりあえず良い男であることには違いない。
内面的なアレは別として、とりあえずこの男が優秀な狙撃手である

ことは万人が疑う余地もない事実。

猛禽の瞳でライフルを構えた男は、スコープの狭いレンズから『虚空』を眺めている。

それはあくまで『常人にとっては虚空にしか見えない』という話だが……。

部屋には大した設備もない。寝る為の配慮は無く、床に穴が開いているのが便器。あとは冷たい鋼鉄が周囲を微塵の隙間も無く囲っているだけ。

窓はある。ガラスも張っていない実に素っ気無い小窓だ。真っ暗闇の空間に光が差し込むのはここから。他に可能性は無い。

彼女は立ち尽くしている。

ボロボロの薄布一枚から見える素足は傷だらけで、酷い“悪戯”を受けたことが伺える。

手錠と首輪は真新しいものではなく、爪を剥がされた惨い指にはすでに感覚がない。

「まだかしら……」

ポツリと呟いた。

彼女は小窓の外を眺めて、ポツリと呟いた。

猛禽の瞳孔には映っている。スコープの先に佇む建造物の姿が。

それは広大な砂漠の中に、たたずむ岩山のように聳える鉄の要塞。それを見ていると捕らわれた囚人達の悲壮な叫びが聞こえてきそうな気がする。それほどに威圧感ある監獄、“レポート”。

通常、この位置からその姿をスコープ越しに確認できれば及第ものだ。が、この狙撃手は監獄の一角、小さな窓を見据えている。

引き金を引くのは簡単。

撃てばそれで終わり、仕事は上がる。

そう、ちよつとでいい。右手の人差し指にほんの少し圧力をかければいい　の、だが。

（へたに目が良すぎるのも考えものだな……）

テンガロンハットの男は静かに息を吐き出した。

「殺してやってくれ。捕まっちゃった仲間は見捨てるのが流儀ですが、何せリーダーだ。せめてなるだけ早く楽にしてあげてください……」

依頼者はそう言っていた。バンダナを斜めに被った優男だ。

周囲に仲間を従え、冷静に、精一杯冷徹な調子で端的に契約を取り交わしていく。

テンガロンハットの男は事務的に契約を取り交わした後、そいつらのアジトを出た。砂漠に囲まれた町の空気は熱く、渴いていて呼吸が辛い。

タバコに火をつける。

天を見上げて立ち止まる。

「イーグル！」

呼び止める声。振り返ると先程の優男が無用心にも隠れ家の入り口に突っ立っている。

いくらか歩み寄り、目の前まで来ると優男は何かを話そうとした。しかし、必死に言葉を飲み込んだ。

少し俯き、目を伏せて押し黙る。

「……………お願いします」

一つ、投げ捨てるようにそう言うと、男はさらに頭を下げた。

直後。優男の仲間が慌てて飛び出し、彼をアジトの中に引きこもうとする。優男は身を起こし、彼に背を向けてアジトへと消えてい

った。

男の去った後に残された白い紙切れ。それは折りたたまれている。タバコの煙をくゆらせて彼は背を向けた。歩き出す。

風に乗って砂が地を這って行く。赤黒いコートの裾がなびき、ツバの広い帽子がずれる。

彼はテンガロンハットを被り直し、一言呟いた。

前編（後書き）

読んでいただき、マコトニマコトニ、ありがとうございます御座います。

後編（前書き）

つか、本編ですね。

それでは、どうぞ！

後編

引き金を引こうとした矢先に思い出した光景。頭を下げた男の肩は震えているように見えた。

どうでもいいこと。契約を全うすれば誰も文句をつけられない。

スコープから目を離す。

とたんに広がる青空、雲が少ない。

高層ビルの屋上にいい風が吹いた。自然の寒気が暑さと不快感を紛らわせてくれる。

あぐらをかき、タバコを一本取り出す。

彼は一言呟いた。

「情けねえ……」

鋼鉄の化け物のような監獄、レポート。ここには幾人もの囚人が収監されているが、そのうちどれほどの者が罪人なのであるうか。ここでのルールが全てなら、とりあえず「法に従わない者は罪」ということになる。なるほど、それならこの世の全てが罪人になりうる。

厳重な警備に張り巡らされた設備。入り込めばそれが子猫であるうとも二度と外には出さない。それが鼠であつたとしても、入り込むことは非常に困難な有様。

ここの看守達による囚人のランク分けはこうだ。情報を持つ罪人は「宝箱」、すでに情報を吐き出した罪人は「玩具」。

そこに宝箱があるのならば意地でもこじ開け、すでに空の箱ならば壊れるまで弄繰り回すのみ。玩具が不足すれば適当にそこら辺から連れ込めばよい。

当たり前のことだ。重要なものを取り出ただけで捨てるなんて勿体ない。どうせなら、飽きるまで遊んでから捨てた方がよっぽど効率が良い。

人道が…人権が…などと楽しいお飯事は人様の前だけですればいい。快楽はここにある。

外で必死に抑えてきた衝動をここでは大いに発散できる。

くだらない縛りは無い。ここでの自分は他者を縛るものだ。

……と、看守及びこの上官共はどうやらそのように、この場を娯楽施設か何かであると捉えているらしい。

ここに“人間”らしさは無い。

彼女は小さな窓を眺めたまま立ち尽くしている。外の世界などどうでもいい。ただ、外から狙いやすい位置に立っている。

捕まった自分の先などもう無い。だが、きっと仲間達は自分を殺してくれるに違いない。

自分勝手な妄想だが、彼女が今考えうる最高の幸福は死ぬこと。

せめて人として死んでいきたいと彼女は願っているのだ。

「……っ！」

彼女の表情が強張る。振り向くとそこにはやはり鋼鉄の壁がある。

そこに見える正方形の線はすなわち鋼鉄の扉。

カッン、カッンと金属音が響いている。

近づいてくる。それは確かに近づいてくる。

“カッンっ、”

音が止まった。場所はこの壁の向こう。

金属が擦れる音と共に何かが外れる。

少しずつ長方形の枠線が動いていく。扉を何者かが開けているらしい。

彼女は刷り込まれた恐怖心からその場でしゃがみこんだ。全身に鳥肌が立つのが安易に理解でき、胃が切り切りと痛む。

細い光が差し込み、扉と壁の隙間から瞳が覗く。

「やあ……」

軽い挨拶と共に一人の中年男性が嬉しそうにこの独房に入ってきた。

「元気だったかい、サラ？昨日は少しやりすぎちゃったから心配していたんだよ……」

左目に白い眼帯をかけた男は股間を弄りながら歪な笑みを浮かべる。

女はその顔を見るや瞳に涙を浮かべて震えだした。その様子を見て、白い眼帯の男は一層嬉しそうに口を歪ませる。

「……昨日は、何本目まで行っただけ？」

白い眼帯の男は少しずつ顔を近づけながら女に聞いた。

「……」

女は声も出せずに、ただただ怯えるだけ。白い眼帯の男は暫くその様子を変わらない笑顔で見つめ続けた。

一発。女の腹部を蹴り飛ばす白い眼帯の男。女は蹲り、うめき声を上げた。

「……昨日は、何本目まで行っただけ？」

白い眼帯の男はさらに顔を近づけつつ女に聞いた。

「う……う。手の指を、全部です……」

女は腹部を押さえ、蹲ったまま答えた。

白い眼帯の男は体を起こすと天井を見上げて顎に指を置く。

「そう、そうだったね。君はつらかったよね、痛かったよね……」

男は屈み込んだ。再び顔を近づけ、つらそうな表情で彼女に言い聞かせる。

「でもね、不思議なんだよ。僕も、痛いんだ……」

白い眼帯をそつとさする。

「君と遊んだ手で目を擦ったからかな？目がね、痛いんだよ。腫れてるんだ、“物もらい”かな……。何をもらったんだろ？」

男はゆつくりと立ち上がり、蹲る彼女を見下ろした。

一発、二発。男が蹴りを放つ。悲痛な呻き声が独房に響き渡った。
「なあ、貰ったのかな。昨日、君からさ？　ねえ。君からさ、君の菌をさ、貰ったんじゃないの？」

三発、四発……。男の蹴りが無数に、容赦無く彼女に浴びせられる。
「なあ！オマエの汚ったねえバイ菌が俺の目を腫れさせたんじゃないのか！？洗ってない豚みてえなテメエのバイ菌がよおつ！！」

女に絶叫を浴びせる白い眼帯の男。すくみ上がる彼女の顔色は青ざめている。

散々蹴りつくした後、男の足がようやく止まった。

「はあっ、はあ。どうしよう、どうやってこの怒りを抑えようか？」

とても嬉しそうに、楽しそうに女の顔を覗き込む。

「なあ、どうしたら良いかな？俺にアドバイスをくれないか、サラちゃん？？？」

気色の悪い息を吐き出しながら眼帯の男はよだれを床に垂らした。
どうすることもできない。彼女はその場で身を固めことしかできない。絶望の涙が冷たい床を濡らす。

“カツンっ、”

扉から差し込む光が遮られた。

「！」

背後に人の気配……。興奮の絶頂にあった眼帯の男は硬直した。
水を差されたとは正にこのこと。独房の入り口に立つ男はツバの広いテングロンハットが特徴的だ。

「誰だ？尋問中に無断で入るのは規則違反だろ……」

眼帯の男は落ち着いた声を出した。

「ああ、すみません。自分さっき“入った”ばかりの新人なもので、ここの規則に疎いんですよ。まあ、大目に見てやってください」

テンガロンハットの男は手を口に当てて笑いを抑えた。

「……新人？」

ちらりと後ろを振り向くと、赤黒いコートを着た男の姿を確認できる。

横たわって屈む女。彼女は突然の来訪者を見て、それが何なのか今いち理解できない。なぜならここはかの監獄、リポート。こんな服装の看守など見たことが無いし、当然囚人でもありえない。

そしてそれ以上に。部外者がここに入ってくることはもつとありえない。

「お前」

「はい、フリーズよろしく」

解りやすく、はつきりとした口調でテンガロンハットの男が忠告する。

彼の右手には拳銃が握られている。きちんとサイレンサーまで付いていて実に用意がいい。

「……ここが“どこ”か解っているのか？」

「知ってて入っちゃだめかね」

「……だめさ」

眼帯の男が死角を利用して左手をポケットに忍ばせた。

“パシユッ”

押し殺した銃声が鳴った。

「っ……ぐ！？」

左のポケットに血が滲む。警報装置は左手と共に破壊された。

「キサマ……！」

「なんだ、知らなかったのか。“フリーズ”動くな”さ。いいお勉強になったね」

拳銃の先に取り付けられた筒から煙が立ち上っている。オートマチックなので次の為に撃鉄を上げる必要は無い。楽なものだ。

「馬鹿にしゃがって……」

眼帯の男は激痛の走る左手を逆の手で押さえながら歯噛む。

「俺を誰だと……ここをドコだと思っている！　こんなことをしてキサマ生きて　」

「黙れよ」

広いツバの下から猛禽の目が覗く。眼球に注射針を突きつけられたような恐怖が眼帯の男に去来した。

その視線は決して女には向けられていない。だが、それでも男が痛烈に放つ威圧感は彼女の背にも寒さを感じさせる。

二人は直感的に、“危険”の二文字を感じ取った。

息を飲み込み、先程とは違う丁寧な様相で眼帯の男は対応を始めた。

「……どうやら大した奴のようだ。なあ、ここを無事に出ても構わないよ。俺が指示すれば難なく出られるからさ」

眼帯の男は震える喉を誤魔化しながら声を出した。ここの長官職である彼が指示をすれば、確かにここを安全に出る事ができるだろう。

「頭と心臓、どっちがいい？」

「……え？」

「撃たれる場所だつてば。この状況であんたが他に何を選択できるよ？」

余っている手で耳をかく。彼は理解力の乏しい人間とのやり取りが嫌いらしい。

「ちょ……、待ってくれ！　俺が生きていないと話を通せない。つまり生きて出られなくなるんだぞ！」

「マミーじゃあるまいし、赤の他人が余計な心配をしなくてもいいあつ！」

テンガロンハットの男が何かを思いつき、口を開く。

押し殺した銃声が鳴った。

眼帯の男の喉下から血が噴き出す。溢れた血液が口に溜まり、流れ出てくる。

「……………！……………！？」

その場に膝を着き、必死に喉元を押さえる。だが、溢れる血液は止まらない。

「叫んでお友達を呼ばれちゃたまらないからな。で、どっちがいい？」

猛禽の瞳孔はさらに細く尖り、同時に突き刺すような重圧も増す。表情には先程から浮かべていた多彩さの面影は無い。ただひたすら無感情で、そして冷たい。

「がっ……………ばっ……………」

意識が急速に揺らいでいく。痛みを感じる間も無い。ただ、苦しい。

震える眼帯の男は弱った眼光で赤黒い男を見上げた。

自分を見下す瞳に慈悲は感じられない。彼はようやく理解した。

この男は人を殺すことに慣れきっている、と。

「そうか、喋れないか。なら、話をつけて俺を安全にここから出す手はずも整えられないな」

定まる銃口と目が合う。

銃口の存在感が意識を定まらせる。

死の際に立つ、眼帯を付けた男の意識を確かなものにする。

「……………！！」

脈が速まる。息が荒い。ただ、死にたくない。

目を見れば大体わかる。たと言葉を発せずとも、特に切羽詰った感情は目を合わせれば大抵伝わるものだ。

「その感情は実にお前に相応しい……………そう思うよ」

ひとさし指に力を込めつつ呟く。

猛禽の瞳が、哀れを乞う視線に一言答えた。

押し殺した銃声が。

薬莢が落ち、金属音が弾ける。

仰け反った頭部。破裂した右の眼球。

眼帯の男は地に伏して僅かに痙攣していたが、やがてそれも止まる。テンガロンハットの男は特に表情を動かすことなく、それを見届けた。

静かな空間。

床の溝をなぞって流れる血液は、やがて傷だらけの白い足を濡らす。

「君がサラかい？」

テンガロンハットの男が口を開いた。

女は驚いた表情もせず、黙ったまま依然として座りこんでいる。

「時間が無いんだ。会話をしよう」

独房の外は静かだ。が、これもいつまでつづくか定かではない。

「……私を殺すのね」

冷めた口調で女は答えた。

「仕事だからな」

帽子のツバを下げ、視線を隠す。女は腑に落ちない表情を浮かべて男を見た。

納得がいかない。

彼女を殺すのなら窓の外から狙撃すればいい。この監獄に侵入するなんて、行き過ぎたマゾヒズムだとは思えない。よっぽどのわけがあるはずだ。

疑惑の目で見られていることに気づき、彼はなんとも困った表情で独房の外を眺めた。

「なんというか、自分が情けねえよ……」

つまらない天井を見上げて呟く。赤黒いコートのポケットを探ると何かを取り出した。

「依頼者から頼まれてね」

取り出されたのは白い紙切れ。それをぶつきらばうに投げた。女の太ももの上に落ちたそれは折りたたまれている。

彼女は暫く静止していたが、やがてそれを痛々しい指で拾い上げた。

開くとそこには一行の文が書いてある。差出人の名は無い。粗末な紙切れに書かれた、わずか一行のメッセージ。

「

」

視界が潤み、目の奥が熱くなる。雫が一つ、二つ。落ちて白い紙に染み込んだ。

小さな紙切れを抱きしめる。

止まらない、溢れる涙が止まらない。つむった目にはあの人の姿が映っている。

「馬鹿な人」

すすり泣いたまま、呟いた。

独房の外がざわつく。ここは特別監房で、比較的人目には付きにくい。だが、それでも時間の問題だ。

テンガロンハットの男が舌を打つ。

「殺し屋さん、お願いがあります」

「んん？」

独房の外を一瞥。拳銃を握る右手に力が入り始める。

「早く、アジトに戻って場所を移るように伝えてください。私……喋っちゃったから」

さらに涙が溢れてくる。自分がどうしようもなく情けない。鼓膜をつんざく高音。

警報が鳴り響く。“侵入者有り”を知らせる警報が。

「あら……」

テンガロンハットの男はツバを押し上げて視界を広げた。

「あと」

独房の外で足音が騒がしい。鍵をかけられた特別監房の閉鎖扉を叩く音。

女は紙切れを強く握り込んだ。見上げて、男の顔を注視する。

「彼に伝えてほしいの、『約束だからね』……って」

こぼれる涙が爪の無い指に当たって沁みる。でも、痛みは感じない。

テンガロンハットの男は肩を竦めて視線を彼女に移した。

「料金は着払いでよろしく」

うざったい外の騒音が耳障りだ。耳を軽くひっかく。

「……。しっかりしてるんですね」

女はキョトンと拍子抜けた後、久しぶりの笑顔を浮かべた。

「仕事だからな」

言葉と同時に銃口を定める。それは瞬間的出来事。

押し殺した、銃声。

慌ただしく扉が開かれる。

ライフルを構えた4人の警備官が独房になだれ込んできた。

彼らはそこで血の溜まりに沈む長官と、額を赤く染めた女囚人の姿を確認。他に人影は無い。女囚人の額はおびただしく出血をして

いる最中で、今、まさに撃たれたといったところか。

『応答願う、こちら3班。独房で長官と囚人一命が死亡している』

一人が無線で仲間に報告を入れる。他の者は周囲を警戒するが、この狭い独房に誰かが潜むスペースは皆無。すぐに警戒を解いて死体の確認に入った。

『賊の姿は既にある。だが、おそらくまだ監獄内にいるだろう。A級厳戒態勢で賊の討伐に当たれ』

「A級？ 特Aとかの方が良くね？」

「！！！！！！」

天井を見上げた時にはもう遅い。既に額が弾けた後だ。無線をかけていた警備官はその場に倒れた。

異変に気づいた他の2人も遅すぎる。銃を構える暇も無く、同様に額が弾け飛んだ。

1人、一際反応の遅い警備官が振り返った時。彼の眉間に、まだ硝煙が立ち上る熱々の筒が押し付けられた。

以後、彼は他の3人と同様の末路を辿ることになる。

テンガロンハットの男が去った独房。血まみれのおぞましい景色の中で事切れている女囚人。その表情は周囲とは違って穏やかで、美しくもある。

彼女の手には、大事そうに白い紙切れが握られていた。

住宅地の外れで繰り広げられる銃撃戦。重装備の軍兵達が一軒の家を襲撃した。革命軍の有志達は次々と命を落とし、軍兵はアジトの奥深くへと踏み込んでいく。

アジトの最奥。

バンダナを巻いた優男が目を閉じて椅子に座っている。息を切らしながら仲間が一人、部屋に駆け込んできた。

「ここはもうだめだ！裏から逃げろっ！」

叫ぶような仲間の言葉。

「裏も、固められているさ」

バンダナを巻いた優男は冷静な態度で受け答えた。確かにこの男の読みどおり、このアジトは表も裏も、軍人達に固められている。

優男は理解していた。自分はここで最後だと……。

「くっ……そ。あの女が喋りやがったんだ、そうでなきゃこんなに早く奴らが踏み込んで来るわけがねえ！！」

息を切らす男は壁を殴りつけて怒りをあらわにした。優男は何も答えず、ただ目をつむっている。

「俺は逃げるぞ、こんなところで犬死なんてごめんだ！何が何でも生き延びてやうっ！……？」

胸に激痛が走る。強い衝撃が脊髄を襲った。

続けて撃ち込まれる数多の銃弾。脳天が飛び散った時点で男の意識は消えた。

忙しない足音。

軍人がこの最奥の部屋に踏み込んでくる。それでもバンダナの男は目を閉じたままだ。

軍人達が部屋の壁に並ぶように立ち、銃口をバンダナの男に向けた。

一人が前に出る。

「首謀者のアレックだな」

威圧感のある低い声だ。だが、問いに対する返答はない。

「……大人しい態度は非常によろしい。そのままよく聞け」
返答がないまま男は話を進める。

「お前をこれから監獄に連行する。抵抗すれば、先程捕らえた者達

を処刑する。さあ、立ち上がって後ろに手を組め」

高圧的な口調で命令を下す。だが、それでも返答はない。依然としてバンダナの男は黙りこんでいる。

「立ち上がって後ろに手を組め！」

叫ぶように命令が再び下される。後ろに並ぶ軍人達が引き金に指をかけた。

緊迫した空間で、優男は目をゆっくりと開く。

毅然として並ぶ軍人達も、向けられた銃口も怖く感じられない。

「死ぬなら今日かな……」

優男は呟き、ゆっくりと立ち上がった。覚悟など、とつくにできている。

ただ、できれば彼女の安否を知りたかった。無事に終わったかどうか……。

「……っ！」

前に立つ軍人はこめかみに力を入れて拳を握った。逆賊ごときが誇り高き軍人である自分の問いに答えない。つまり、無視している。彼にとってこれは耐え難い怒りの要因となった。

「お前も、捕らえた奴らも、全員処刑してやる！ ああ、銃殺刑でグチャグチャにしてやるっ！」

軍人が手を上げた。射撃用意の合図だ。

「つてえ！」

勢い良く腕を振り下ろす。

並ぶ銃口から数多の弾丸が放たれ、目の前に立つ優男が穴だらけの肉塊と化す。はずだった。

しかし、どうしたのか。目の前の優男は今だ健康な風貌でそこにいる。

「つてえ！！」

もう一度指令を下すが、やはり弾丸が数多に放たれる轟音は響かない。

不思議に思っただけで振り返ってみると、おかしいことに部下たちの姿

がない。視線を下に移して納得した。なるほど、部下たちは顔面から大量に出血しながら床に倒れ込んでいる。痙攣しているものもいれば、すでに動いていないものもいる。

彼はいまいち現実が理解できない。

驚く事もできずにただ、呆然と部下たちの有様を見渡す。

傍らから聞こえるのは金属と金属が擦れる音……。

「今更つける意味もないか」

そう言つて銃口から音消しの筒を外す。ネジつて装着するので、外す時はこうして捻る必要がある。

「だ、！」

軍人は拳銃を構えてそいつに突きつけた。傍らに立つ男はツバの広いテングロンハットが特徴的だ。

「誰だ！キサマっ！」

「仕事は無事に終わったぜ」

取り外したサイレンサーをポケットにつっこみつつ優男に話しかける。

「……そうか」

優男はその言葉を聞いて、天を仰いだ。

二人のゆつたりとしたやり取り。置いてきぼりの軍人としては面白いはずもない。拳銃を両手でしっかりと構えて眉間にシワを寄せた。

「何者だと聞いているっ！」

“ガァアンッ”

渴いた銃声が響き渡った。

軍人は仰け反つて倒れたが、だからといってどうという事も無い。テングロンハットの男は報告を続けた。

「任務はそつなく遂行した。暗殺は無事完了」

拳銃を持つ手でライターを掴み、器用にタバコに火を点ける。慣

れたものだ。

「そうですか……」

優男は崩れるようにその場に座り込んだ。

「無事、あいつは死ねたんですね」

手の平で額を覆いながら優男は床を見つめた。

のはあいつの姿。

目を瞑る。閉じた目に映る

「彼女から伝言。“喋っちゃったから逃げて”だってさ。もう遅いっばいけど」

タバコの煙と共に静かに伝えた。

それを聞いた優男は目を開く。瞳が潤み、熱いものがこみ上げてくる。伝え聞いたセリフは、あいつの声で聞こえた気がした。

「もう一つ伝言」

テンガロンハットの男は帽子のツバを引いた。

「“約束だからね”……だよ」

伝えられた一言。

その一言を聞いた優男は両手の平で顔を覆った。抑えてきた気持ち が たまらずあふれ出してくる。

恨みや怒りのためではない。彼女の言葉を伝え聞けた事が嬉しいから、彼女がいなくなった現実が寂しいから涙を流している。そして、彼女の残した言葉の意味を知っているからこそ気持ちを抑えられない。

男は声を押し殺して泣き続ける。

「で、どうすんだ？裏の連中はあらかた始末した。今ならザルだぜ」
テンガロンハットの男は腕を組んで煙の行き先を見送った。

「約束があるので……」

「　　そうか」

タバコを床に投げ捨てる。

火を軽く靴底で消すとテンガロンハットの男は拳銃を床に滑らした。拳銃は優男の足に当たって止まる。

「ターゲットを撃った銃だ。どうせならそれがいいだろ」

優男の足元にある拳銃が銀色に鈍く輝く。彼はそれを拾い上げ、しっかりと右手に握った。

「待て。報酬は？」

テンガロンハットの男が優男を制止する。ここにきてもビジネスのことは忘れない。

優男はくすりと笑みを浮かべて答えた。

「ああ、それならそこにある財布のカードを持って行ってください。そこから引き出しても足は付きませんから」

優男の言葉の通り、無造作に置かれている財布からカードを取り出す。それをニコヤカにコートの裏ポケットに収めると、テンガロンハットの男はさっさと歩き出した。

ふと、立ち止まる。

テンガロンハットの男は帽子のツバを押し上げて少しだけ振り向いた。

「二人に幸がありますように」

彼はその一言を残してアジトの階段を上って行く。

「……ありがとう」

優男は既に見えなくなつた背中に感謝を述べ、こめかみに銃口を当てた。

彼には約束がある。それは直接取り交わしたものではない。

それでも、彼女は約束を信じてくれた。孤独な世界で信じてくれた。

今はそう、きっと彼を待っていることだろう。一人きりで彼を待っているに違いない。

もう、寂しい思いはさせない。これからはずっと一緒だ。

だって、約束したから……。

「サラ、一緒に暮らそう。二人で、幸せに」

優男の頬を雫が伝い落ちる。汚れた蛍光灯の光に彼は何を見たのか。

土壁に囲まれた血まみれのおぞましい景色の中。彼は人差し指に力を込めた。

全てが終わったなら、二人で暮らそう。今度こそ、君を幸せにしてみせる

ある晴れた日の夕暮れ。傾斜のキツイ坂を下って行く。

坂の先に広がるのは落ち行く日に染まる海。遙か先の地平線には赤い太陽が沈んでいく。この国の夕日は美しいと聞いていたが、なるほど、たしかにこれは絶景だ。

だが、そんなことも言っていない現状。

余計なリスクを犯した彼はこの国から出るのがちよつと面倒な事になった。こうなる事は解っていたのに、まったくもって自分が信じられない。

テンガロンハットの男　アルフレッド・イーグルは帽子の広いツバを押し上げて振り返った。

リッジウェイガールの町並みが見える。それも彼ならではのこと。それは常人には捉えられない距離にある。

あいつの最後は見届けなかった。別に見ても見なくても同じ事。イーグルはポツリと独り言を残すと、夕日の沈む坂を下っていった。

その後姿。

ツバの広いテンガロンハットが特徴的だ

。

.....
E n d

後編（後書き）

どうも。読んでいただけたのなら、本当にありがとうございます。

同じ銃士が主人公の『女神の古都』も合わせてよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1271m/>

監獄の リッチウィンガー 【COINS】『朱雀』

2011年6月7日02時25分発行